

残暑 お見舞申し上げます

暑くなつたかと思つたと急に涼しい日が続いたりの毎日。皆様はいかがお過ごしでしょうか。前号よりだいぶ間があつてしまいましたか。35号をお送りします。通信もKISHIDAIAも原稿が“夏枯れならぬ”一年中“枯れ”をしておりませう。この夏の活動の成果をぜひお送り下さい。あまちしていきませう。

● 住所変更

浜村 徹三氏

〒428 静岡県榛原郡金谷町金谷2769
茶業試験場内

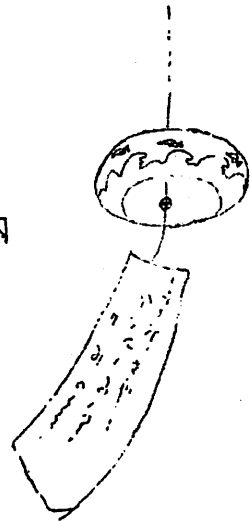
◆ 新入会員

阿左見 正起氏

〒175
東京都板橋区高島平9-1
大和寮3号306

佐々木 勝實

〒983
宮城県仙台市旭ヶ丘二丁目23-7 0222-75-0128



P.T. LEHTINEN 博士講演会 8月16日(日)

詳細は本文参照

10月の観覧会・天覧山

今年度3回目の観覧会です。集合・飯能駅(西口)駅前10時

雨天決行。連絡は〒357 飯能市本町5-4 04297-3-3022
嶋田 順一

5月の観察会に参加して

熊田 憲一

列車の中で降り出した雨は東飯能に着いても止まず、集合場所の西武線飯能駅に着く頃にはカサかほしくなるほどの降りになってしまった。私を含めたハ高線組が10時の集合時間に20分ほど遅れて着いたところで、今年度の観察会の世話係・嶋田 順一さんを先頭に目的地天覧山(てんらんざん)へ向った。

天覧山は飯能駅から歩いて15分たらず、市内を斜めに抜けるとすぐである。天覧山の登り口では折よく車で来た松本さん一家と合流した。一同がそろったところでまずは自己紹介。いつもは昼食の時にするのだが、初めてののもあり、先にそれぞれの名前がわかた方がなにかにつけて便利である。この嶋田さんの心づかいである。

今回の参加者は、横浜の佐藤幸子さん、国分寺の野真登新海栄一さん、川崎の高橋登さん、東京の藤沼克巳さん、我孫子で手賣名のワモ調査をしている渡辺茂一さん、最近コトリワモに興味を持っている相倉憲一さん、小田原の先生池田博明さん、何をしているのかよくわからない豊大生鈴木隆浩さんと国大生貞元巳良さん、地元飯能出身の嶋田順一さんと東京の田舎羽村の私、そして青梅の長島忠義さんは中学1年生になった教え子斎藤君と興陽君と一緒に、松本誠治大先生は奥様と齋藤・斎藤両家を連れての参加である。また、嶋田さんの幼なじみの三上さんがあきさんを連れて参加され、全員で20人と、雨の降る悪条件にもめげずに多数の方が集まった。集まった人の中には台風や集中豪雨の中でも採集に行、たことのあるものもあり、

このくらい天気のほうが曇くもないし、ワモを見るにも最高である。などと喜ぶ百がら、さ、早くその場からワモを探がしはじめた。散開してしばらくすると雨は降り止み、その後皆の熱意に負けたのか雨は落ちてこなかった。

自己紹介していた場所を回めれ右してちょっと探ただけですぐにワモが目に見え込んでくる。ヒロハヒメワモ、ウロコアサガワワモ、ハラギヒメワモ、ジミワモ、ギンメッキゴミワモ等々。ヒロハヒメワモはもうすぐ卵を産みそうである。ワサガモやコリワサガモも網を張っている。頭胸部も腹部も赤いコリワサガモはつい2-3日前に産み出したかのように、まだまだ小さい。草の根元にはハリジロサワワモが網を張り、ヤミロカワワモは地面を歩き回っている。あちらこちらでワモの名前を言う声が聞こえ、それを次々と世話係の嶋田さんがノートに書き止めてゆく。私も「ツツデゴミワモ!」とやる。「はい、そのワモはもう書いておきます。」と返事が返ってくる。そしてそれぞれめからなワモが「で」と「これは○○ワモだ」「11や△△ワモだ」とやる。そして松本さんや新海さんなどの古参に石壁かめにゆく。「このワモが××ワモですか。初めてみました。」など、なかなかにぎやかである。キジロゴミワモやチュウガワコガネワモが網を張り、足もとにはウツキゴミワモが走ってゆく。ここはワモの豊園で、採集や観察には絶好地のようだ。

そのうち加藤綱代子さんと松浦祐司さんが自いついてきた。「天覧山は駅から道標があったし、談話会の観察会じゃすぐに自いつくから遅れても安心して来た。」とは2人の弁である。そう言えば散開してから30分はとうに過ぎているのになんと100mほどしか進んでいない。



この刻々とした歩みは我々の名物で、前年度観覧会の高尾山では10時に高尾山口を出発しても昼食は1kmも進まない筈で「食べる」というもので、この超牛歩ぶりには国会議員の先方もマッ着になることうけあいである。しかし一たび観覧会に参加してみればこれは充分納得がゆくスピードなのだ。20人あまりが管瓶片手にあちうらうこちうらうこ、四方八方に飛び回り、少しでも多くのワモを探したそうとするので、自然スピードが落ちるものなのである。そのおかげで皆の通過したあとには「ノートに記さなかったワモはいない」と言えるほどである。

加藤さんと松浦さんが最後の参加者となって総勢22人がオリエンタリングやハイキングの人たちに抜かれながら、刻々として進みぬ進行を続けた。

入口からしばらくは左手に寺の敷地があり、その垣根にヒリついて松浦さんはワシワシの採集に余念がない。右手の杉林では樹皮のところからミヤクモやコマツエンマクモが見つかる。ワカオニクモを管瓶に入れてくる人もいる。山頂へ直ぐ登る道に入らずに山麓を回れる道に入る。ここからはコナラなどの雑木林が続く。落ち葉をかきまわしているというシマクモやワシワシの幼体がでてくる。そして手もとを横切つてゆくアズマキシダクモを追って目を上げるとハツリクモの網が目に入った。ここは2月に来る時はフルイを持ってくれば面白そうである。木の根元にはアシヨレクモやヤマヤチクモが網を張り、ヨダンハエトリが徘徊していた小さな斜面にはナンアコリクモが小さなカゴ網を張っていた。まだ幼体で1mmほどしかない。このワモを初めて見たという人が以外と多かった。管瓶に入ったこのワモをルーペでながめ、一緒に網をも見る。形態も生姿も一緒にわかるとしようのが観覧会の良いところなのだ。水の流れるそばには

コモリクモの幼体が走り回り、イオウイロハシリクモやアズマキシダクモもそれに混じる。枯草を踏みつくとシバクモも飛び出してくる。

進んでゆくうちに誰からともなく「おなかですいた。」の声上がる。時計を見るともう12時近くである。嶋田さんの予定ではこれから山の中腹を回つて中段と呼ばれている広場で昼食なのだが、まだ半分しか進んでいない、とのこと。しかし時間が時間なので道幅が広くなつたところで昼食となった。思い思いのところに腰をおろして食事をすする。歩くのは遅くても食べるのは早い。食事が終つた人は休息場所の近くをうらうこする。キハダカニクモ・ワリチャサクモ・ネコハエトリ・ハナクモが次々と見つかり、古林を動かしてその中からエサをくわえたゴアシダクモを見つけた。さそくカメラを向ける人もいた。探蛛に歩き回れる人、持ってきた標本を見せよう人、記録したワモをノートをつき合わせて確かめている人などそれぞれである。日頃疑問に思っていることなどを聞いている人もいる。昼食のひとときも談話の席に早がかりである。こんな時は日頃の疑問はもちろぬ易い話から難しい話、ワモの最新情報が聞くことができ楽しい。そんなこんなでなかなか腰が上がらず、やと出発したのは1時間半ほど過ぎたからのことだった。そして、その時まで嶋田さんのノートには60余種が記録されていたようだ。

ここから先は杉の植林地帯を歩く。崖地ではヤマシクモが粗目の網を張り、少し明るい林縁にはオオシロカネクモの幼体が小さな糸丸網を張っていた。林床を走るコモリクモを捕えて新海さんが「これは絶対セアオコモリクモだ。」と管瓶に入れてゆく。植林地帯に入つて急にワモの姿が減つた。ここぞとばかりに世話係の嶋田さんは距離をかせぐ。アツと言う間に昼食予定地の中段である。ここですすは記念(5月の観覧会に参加して・くま)

撮影。独身最後の観覧会を楽しむ新海さんがアゴの腕を突撃して「はいが4リ」。ここまで来るとさすが本道、人が多い。

ここから山頂へ向うが、再び本道から別かれて進む。今までの遅れをヒリヒリすためか、はたまた山頂を越えた向う側、鷹手の道に期待してか、皆ハイカーと共にサッサト歩く。飯能市街を見下ろす崖、ふちはロウワライミングの練習場となっており、そこにある岩穴には行くことができなかった。早く(普通の人と一緒に)歩いたのがすぐに山頂に着いた。14・5年前に来たことのある新海さんは「こんなところがあつたけ。あ、ここは覚えてる。」と感慨深げである。14・5年前というと大学生の鈴木さんや貞元さんはまだ小学校低学年、長島さんと一緒に来た中学生などはまだ生まれていなかった。なごとの話が、新海さんは改めて年を感じさせられたらしい。山頂で一休み。すでに記録は70種を超えている。5月の観覧会で「はすばらしい記録だ」。

ここまで来て私と新海さんはお互い仕事の手合で下山することにした。嶋田さんの話ではこれからはより環境的にも良いところだ。ヒのヒ。2人共後ろ髪を引かれる思いで下山する。

4時間以上かけて登ってきた山頂からの下りは「アッ」と言う間、5分もかからぬうちに登り口まで来てしまった。あまりの近さに2人共ビックリ。これでは駅で時間が余る。と2人して寺の境内に入り込んでワモを探した。大きな石燈ろうでは多くのコケヒメガモがあり、必ず共に成体で、もう半月もすれば「卵のうを作りそうだ。小立ちの枝の間ではツリネガモが条網を引き、アジサイの植込みではビジメオニガモが網を張り、葉裏や葉先にはマシメオニガモヤトガリオニガモが静止していた。石垣の石のすき間でオオヒメガモ・ユラシクモを見、いくつかある石燈ろうのほとんどのコケヒメガモがいることを確認、境内を一周して帰路についた。

後日嶋田さんに聞いたところ、別かれた後も次々と記録が増え、ついには90数種になったことを聞いた。そしてこちらの境内のワモもいくつか追加種となり、また各自が持ち帰った当日同定できなかつたワモも種が判明すれば、100種に手が届く快記録になるかも知れない。ヒのヒである。ワモを持ち帰った人はお手数でも記録を嶋田さんに伝えて下さい。

次回の観覧会は7月26日(日)、学生諸氏が夏休みに入、てすぐである。

ここ天覧山及びその周辺では過去ソメワケトリリフダマシをはじめとする各種のトリフダマシ類やゲボウワケモなどが地元嶋田さんによって記録されており、7月の観覧会にも大いに期待が集まり、昨年高尾山で樹立した1日の観覧会での日本新記録116種を抜く記録が生まれ、日本記録の更新と共に世界の大観記録となることでしょう。

7月26日は今回同様10時に西武池袋線飯能駅前集合です。西武池袋線は池袋より20分おきに電車(飯能行・西武池袋線)が出ています。八高線を利用するには11:53・9:21 拜島 9:36 東飯能 10:00 東飯能駅から西武線飯能駅までは一駅ですが西武線を持たず(10:25 東)に歩いて15分ほど遅刻して参加します。また、皆が出発した後に来ても道標は完備されていますし、地元の人に聞いてもすぐに教えてくれるはず。ここに地図も書いておきますので安心して参加して下さい。雨が降っても今回のように関係なく行ないます。不安な天気の場合はカサをお忘れなく。そして標本や話のタネもついでにいかがでしょうか。

★今年度の観覧会は あつ ★
7月26日・10月18日 1992.2月21日
です。

(5月の観覧会に参加して) (76)



飯能から天覧山へ
駅

これでわからなかった人はもう誰かに聞こう!

山頂から裏へは行かなかったのだからわかりませんでした。

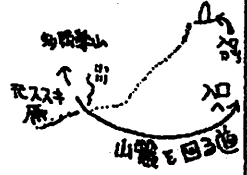
蜘蛛学会の祖・植村利夫博士が昔ここに来て、すべたひょうしにカネトトメテリ"モをつかまえた。という話があります。あなたは何かをつかまえますか。

おれが: どなたかは忘れたので"すが", 私の採集したサウゲモをタマヤミサウゲモと説明してしまいましたが, 後日の検鏡でこのクモがハガタヤセクモとわかりました。ここで"おれびして"訂正いたします。

7月の観覧会にも参加して くまだけんいち

通信が予定通り出なかったのて、残念ながら7月の観覧会は終わってしまいました。

真夏の日の下、参加された方は近藤恭子さん、利岡匠さん、堀越雅弘さん、池田博明さん、高橋登さん、鈴木勝浩さん、松浦祐司さん、嶋田順一さん、熊田の9名でした。人数は前回の半数ほどになってしまいましたが、少々曇り気味のこの日、75種のクモが確認されました。また、今回から記録したクモは一頭づつも採集し、紙と記録だけでなく、標本としても記録保存しておこう、というコトに"モ"をなりました。観覧場所は入口の草原が"ブルドーザー"で裸地化し、山裏のススキ原はきれいに刈られてしまおうというアクションがあり、トリノガマシ全種と記録達成に燃えていた若人はがっかり。しかし松浦さんは早く共にいた分、蜘蛛のジクモ3頭とクモ1頭、計4頭もつかまえ、トラップ以外ではそうそうお目にかかれないうこのクモのおを大量に見ることができました。



1981年8月10日発行

談話室

会計局 だより

郵便振替 東京7-74885

- 会費受付 (敬称略) 56年1月21日～8月10日
56年度
古内栄一・千国安之輔・貞元巳良・林俊夫・林秀幸
中平清・大類正久・小澤實樹・梅林力・藤井悦子・高橋米夫
阿左見正起・佐々木勝實

◦ 御寄付

古内栄一様

会費は一般	2,800円
学生	2,000円

会計局

〒190-11 東京都西多摩郡羽村町羽加美3-6-31 熊田 豊一 宛

P. T. LEHTINEN 博士講演会

篩板類と無篩板類の分類と系統に関する研究で世界的に有名な、フィンランドTurku UniversityのDr. P. T. Lehtinenがアメリカクモ学会出席後、8月15日に来日されます。それを機会に下記日程で講演会（大阪では採集会の後講演会）を開催いたしますのでご出席下さい。

— 東京講演 —

日 時 1981年8月16日(日) 午後1時より
会 場 学士会館 (千代田区神田錦町3-26 (292) 5931)
会 費 3,000円
講 演 0 サラゲモとコサラゲモの分類学的研究 (アメリカクモ学会で発表)

0 フィンランド及び北ヨーロッパのクモ類相とクモ学の現状
この後に日本関係の発表を行ないたいと思いますので、発表のあります方は同封のハガキにタイトルをお書き下さい。

申し込み 同封のハガキにて7月31日必着にて新海栄一宛申し込み下さい。当日参加も可能です。

昭和七年 五月 二十一日 発行

501 (1)

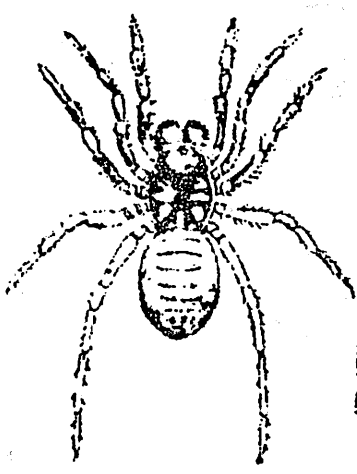
おんあか



東京 赤坂 九段

越し屋さん じゃけん

小のな住まいがす
「山は雨降動はかり地いんら
へ。山田を流すのに能動やから
一 葉葉は雨降動はかり地いんら
ながら雨を止めた。
大分市郊外の丸尾山の中腹。雨り
た、山をのり回して遊戯した面影
が記される。毎年の雨降動はかり
はいつていた。林立した雑草から
雨降動はかり地いんら。
「山は雨降動はかり地いんら
は、山をのり回して遊戯した面影
が記される。毎年の雨降動はかり
はいつていた。林立した雑草から
雨降動はかり地いんら。
「山は雨降動はかり地いんら
は、山をのり回して遊戯した面影
が記される。毎年の雨降動はかり
はいつていた。林立した雑草から
雨降動はかり地いんら。」

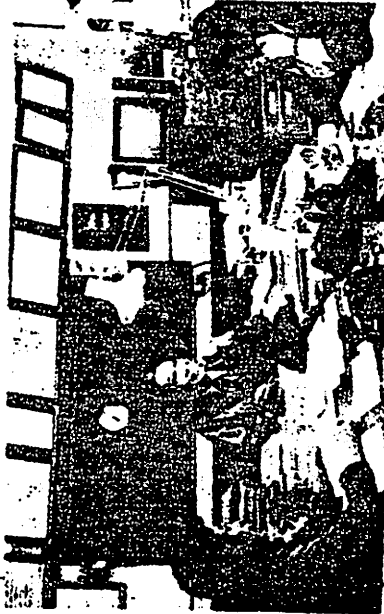


キムラグモのオス

毛虫化の虫が押し寄せる野原へ行って引
つ越し作庭。試験管がコンテナ一袋に

世界では日本の大分、熊本、宮崎、鹿児島が主な生産地。大分県が北限。原因は畑がある畝も原始的なクマで、エビやカニの仲間から発達したことがわかれる。体長はオスが10センチ、メスが15センチ前後。樹穴式のトンネルは

キムラグモ



ふだんはコキアリアやネズミの駆除会社の社長さん。左が園の郷子さん

岡山県内の郷子さん、このキムラグモの「引こ」を始めたのは、十五年ほど前から。キムラグモは世界でも珍しい、わずかにほんの原始的なクマ。最近、その巣のある林野には、開墾の手が次々伸びて、破壊しちよくなってきた。たった二匹の生き物というものが、その巣が崩壊し、まひ腫してやむを得ない思っている。新聞やテレビで、開のありまな所が崩壊されると知ると、すぐに車に乗って出た。そのキムラグモも、園を準備していきれると、同じく愛した。ところが中には、存在しているものも少なくない。すでに、目三十五匹のクマがいない。これは、約十八匹のキムラグモの引こをしよう、開から救った。五十五年たった。開のキムラグモは、約三匹のクマが壊れてしまい、約三匹のクマが壊れた。それから、学校の建設を無理と、行は、

「引こ」はコキアリアやネズミの駆除会社社長さん。左が園の郷子さん。キムラグモは、世界でも珍しい、わずかにほんの原始的なクマ。最近、その巣のある林野には、開墾の手が次々伸びて、破壊しちよくなってきた。たった二匹の生き物というものが、その巣が崩壊し、まひ腫してやむを得ない思っている。新聞やテレビで、開のありまな所が崩壊されると知ると、すぐに車に乗って出た。そのキムラグモも、園を準備していきれると、同じく愛した。ところが中には、存在しているものも少なくない。すでに、目三十五匹のクマがいない。これは、約十八匹のキムラグモの引こをしよう、開から救った。五十五年たった。開のキムラグモは、約三匹のクマが壊れてしまい、約三匹のクマが壊れた。それから、学校の建設を無理と、行は、

「引こ」はコキアリアやネズミの駆除会社社長さん。左が園の郷子さん。キムラグモは、世界でも珍しい、わずかにほんの原始的なクマ。最近、その巣のある林野には、開墾の手が次々伸びて、破壊しちよくなってきた。たった二匹の生き物というものが、その巣が崩壊し、まひ腫してやむを得ない思っている。新聞やテレビで、開のありまな所が崩壊されると知ると、すぐに車に乗って出た。そのキムラグモも、園を準備していきれると、同じく愛した。ところが中には、存在しているものも少なくない。すでに、目三十五匹のクマがいない。これは、約十八匹のキムラグモの引こをしよう、開から救った。五十五年たった。開のキムラグモは、約三匹のクマが壊れてしまい、約三匹のクマが壊れた。それから、学校の建設を無理と、行は、

「引こ」はコキアリアやネズミの駆除会社社長さん。左が園の郷子さん。キムラグモは、世界でも珍しい、わずかにほんの原始的なクマ。最近、その巣のある林野には、開墾の手が次々伸びて、破壊しちよくなってきた。たった二匹の生き物というものが、その巣が崩壊し、まひ腫してやむを得ない思っている。新聞やテレビで、開のありまな所が崩壊されると知ると、すぐに車に乗って出た。そのキムラグモも、園を準備していきれると、同じく愛した。ところが中には、存在しているものも少なくない。すでに、目三十五匹のクマがいない。これは、約十八匹のキムラグモの引こをしよう、開から救った。五十五年たった。開のキムラグモは、約三匹のクマが壊れてしまい、約三匹のクマが壊れた。それから、学校の建設を無理と、行は、

小さく盛り上がった土があった。
 彌屋さんは突然、地べたにどっかり
 と腰をおろした。

「キムラ(シモ)がいちよきぞ。
 この土の質は六を越してな」

彌屋を導いた、盛り上がった土の
 一部が、白く硬く乾いている。横田
 形をして、とても小さい。横六式の
 キムラシモの住まいに通ずるフタ、
 つまり土のシャッターだ。

「フタの内側には、ちゃんと糸を
 張りめぐらして、丈夫に作ってある
 けん。――まあ、引っぱるけん
 な」

スロップンフタの廻りを廻り始め
 た。木の根がぶらぶらかり、土が顔一面
 にぶつかかった。彌屋さんは廻り私
 おちてしまふ。

絶滅寸前の珍種千八百匹

開発避け別天地へ



クモの引っ越し先へ向かう彌屋さん

もシムラサーでならしたあと
 で、とても残念で」

彌屋さんは、穴の廻りを十五分ほ
 ど廻り込んだ。

「いちよった。いちよった」

は舞が約一坪のオスだった。彌屋
 さんの手のひらをはい回る。

このキムラは、元氣いいけん。
 まあ、ちよっと静かにしてな」

談話通信 No. 35

東京蜘蛛談話会

事務局

〒185

国分寺市本町1-6-6

新海栄一

通信責任 松浦祐司

本号代行：熊田憲一

朝からその日も近い。蜘蛛、只鼠のコ
 ツペパンをかじって始末した。
 と、神社の境内で、小さな白っぽい
 フタが足つかった。スロップンを持
 つ手が腫えた。夢中で廻り廻った。
 いちよった、キムラだ、手のひら
 に乗せて何度も叫んだ。

「六匹ほどのオスだったけん、で
 っかへ見えたわ」
 あまりのつれづれに、「一箇間ほど
 降り込んで見とれてしまった。

警察官から社長業へ

大分大学を卒業後、彌屋さんは警
 察官になった。非難になると、やは
 りキムラを追いかけた。三十七年、
 警察の仕事がいやになって、石畑金